様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１９５５９

研究課題名（和文）包括的暴力防止プログラムでの看護師の振り返りにおけるサポートツールの開発

研究課題名（英文）Developing of a Support Tool for Nurses at post incident debrief and review in Comprehensive Violence Prevention and Protection Program

研究代表者
木下　愛未（Kinoshita, Aimi）

信州大学・学術研究院保健学系・助教

研究者番号：５０７８３２３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、精神科看護師の援助の要素について、Interpersonal Circumplex model（IPC)の概念を枠組みに量的・質的に明らかにした。新規性の高い結果として、当事者への治療を優先したかかわりであるPA（支配・管理）は、反発から後悔へと、当事者の認識が経時的変化を示す場合があり、当事者の劣位に立つHI（服従・従属）の行動背景には看護師の行動が支配的・管理的にとられないように意図した場合があった。
明らかにした精神科看護師の援助の要素を、包括的暴力防止プログラムの「振り返りと報告」に活用し、パイロットスタディではあるがその有用性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、CVPPPの介入要素の一つである、「振り返りと報告」で活用できるツールとその効果的な活用方法を開発した。従来、当事者－看護師間の対人相互作用は目に見えず、暴力が関連すると感情的になりやすいために、「振り返りと報告」は熟練した臨床経験がなせる業とされてきた。本研究で開発した「振り返りと報告」の手法は、簡便でわかりやすく、客観的に深く援助を振り返ることができた。これは看護師が当事者に対して無意識に持っていた感情や反応への気づきにつながり、当事者と相互理解を深め、協働する立場が形成されることが期待できる。それにより当事者と対立することのない安心な環境作りが促進されると考えられる。

研究成果の概要（英文）： This is a quantitative and qualitative study of the elements of psychiatric nurses’ behavior, using the Interpersonal Circumplex model (IPC) concept as a framework. The dominant and managing nurse's behavior that prioritized treatment to the patients involved sometimes showed changes in the patient’s cognitions over time, such as from repulsion to regret. In some cases, the nurses' subordinate behavioral backgrounds were intended to prevent the nurses' behavior from being perceived as dominant and managing by the patients involved. The elements of psychiatric nurses' behavior that were identified were utilized in the Comprehensive Violence Prevention and Protection Program (CVPPP) "post incident debrief and review" to demonstrate their usefulness, albeit in a pilot study.

研究分野：精神科看護

キーワード：包括的暴力防止プログラム　対人円環モデル　振り返り　精神科看護師　援助特性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

精神科医療において、患者による暴力の防止、看護師による暴力・虐待の問題は重要な課題のひとつであり、患者－看護師の双方の安全・安心な環境づくりは急務である。2004 年、わが国では患者からの暴力を看護師が適切に対応するためのプログラムとして、包括的暴力防止プログラム（Comprehensive Violence Prevention and Protection Program：CVPPP）が開発された。CVPPP は、患者－看護師が対立せず協働することで双方の暴力を防ぐという理念を持ち、相互理解に基づく「リスクアセスメント」、豊かな言語的・非言語的コミュニケーションによって暴力が起こりうる危機的状況を回避する「ディエスカレーション」、相手に配慮した「身体的介入（ブレイクアウェイ、チームテクニクス）」、暴力事故後の「振り返りと報告」の 5 つの介入要素で構成されている。とりわけ「振り返りと報告」は、すべての暴力に関わった人の心的負荷が解消され、日常の穏やかな状態に戻るためや、再発防止のために行われる。患者－看護師間で起こる暴力の問題は、単に加害者のみに起因するのではなく、加害者と加害者を取り巻く人々との間にある目には見えない一連の過程の相互作用（対人力動）から生じる。したがって、「振り返りと報告」は加害者に反省を促すものではなく、対人相互作用を客観的に分析し、そのとき生じていた状況を理解するためのものである。これは元来精神科看護では重要なものとされてきた。しかし対人相互作用を理解しようとする営みは、目に見えず、暴力が関連していることで感情的になりやすいために、その取扱いは熟練した臨床経験がなせる業とされてきた。

諸外国では対人円環モデル（Interpersonal Circumplex model：IPC）を用いて、対人相互作用を視覚的に、システマティックに理解する取り組みがなされている。IPC は親密軸（拒否性－親和性）を横軸（x 軸），支配軸（優位性－劣位性）を縦軸（y 軸）とした直交座標の原点を中心とし、縦横軸の間を分割した 8 領域で対人行動特性を示すものである。隣接する領域は正の相関関係をもち、原点を挟んで対極にある領域は負の相関関係をもつ。IPC の 8 因子は PA、BC、DE、FG、HI、JK、LM、NO と形式的にアルファベットが付与されている。PA は当事者に対する支配や管理を、BC は当事者への傲慢さや利己を、DE は当事者との疎遠や冷淡さを、FG は援助への不安や消極性を、HI は当事者に対する服従や従属を、JK は当事者への謙虚さや利他を、LM は当事者との親密さや温和を、NO は援助への自信や積極性を示す。IPC は心理尺度でもあり、主成分分析を行うことで親密軸（DE－LM）を X 軸、支配軸（PA－HI）を Y 軸とする座標軸に 8 因子が付置される。人の関係性が近接（親密軸）と力（支配軸）という 2 軸の組み合わせによって定義されうることから、IPC は人の関係性を分析することに優れている。例えば英国では IPC2 つとチェックリストを用いて、患者－医療者自身の無意識的な行動の背景にあった行動特性を精神力動的に分析するツールがある（Kirtchuk, et al., 2013）。しかし精神科での援助は文化的・社会的背景の影響も大きい。量的研究から明らかにされたわが国の精神科看護援助を示す IPC の親和性は、「援助への信念があること」「援助への明確な意図や根拠があること」などの援助への熱心さを示し、人との親密さを示す IPC の親和性とは異なる概念であった（木下・下里，2020）。これらのことから、IPC という視覚的にわかりやすいツールを用いて患者－看護師の対人相互作用を理解するには、わが国独自の検討が求められると考えられた。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の 2 点である。

1 つめは、IPC の枠組みに基づき、看護師の援助行動上の特性の要素を明らかにすることである。そして明らかになった要素から援助特性の対人円環モデル図を作成する。

2 つめは、作成した対人円環モデル図を利用し、看護師が患者の暴力に介入した際にどのような特性が働いていたかを振り返るツールとして活用するための利用方法を検討する。具体的には、包括的暴力防止プログラムの構成要素としての「振り返りと報告」への応用を目指す。

看護師の行動の背景にどのような特性が働いていたかを知ることで、看護師が自身の行動を客観的に理解できる。これは当事者に対して無意識に持っていた感情や反応への気づきにつながり、当事者と相互理解を深め、協働する立場が形成されることが期待できる。そして当事者と対立することのない安心な環境作りが促進されると考えられる。

３．研究の方法

（１）看護師の援助上の特性の要素について IPC を用いて視覚的に明らかにする

看護援助行動用対人円環質問紙（Interpersonal Circumplex model: IPC-PC）の再現性を確認し、改良することと、インタビュー調査により看護師の援助行動上の特性の要素を質的に明らかにした。

1 つめの調査は、IPC-PC の再現性の確認のための調査であった。2019 年度に全国の 4 会場で開催された CVPPP トレーナー養成研修（4 日間 24 時間のプログラムで、援助として CVPPP を展開できるようになることを目的としている。修了後は自施設で CVPPP の普及に携わることができる）受講者 135 名を対象に IPC-PC に回答してもらった。

2 つめの調査は、IPC-PC の改良に関する予備的調査であった。CVPPP トレーナー養成研修を取りまとめている日本こころの安全とケア学会に協力を依頼し、2019 年度に全国で開催され

た CVPPP トレーナー養成研修の受講者のうち 1,023 名に対し、修正試作版 IPC-PC に回答してもらった。

3 つめの調査は、これまでの調査が、CVPPP トレーナー養成研修を受講する者の特徴を反映した可能性を考慮したため、もう一度 IPC-PC の再現性の確認を行った。関東地方の医療観察法指定入院医療機関を持つ施設に協力してもらい、2022 年 8 月～10 月までの間に精神科病棟に勤務し、直接患者にケアをしている看護師 1,715 名を対象に、原版 IPC-PC に回答してもらった。

4 つめの調査は、看護師からみた看護援助を明らかにすることを目的として、A 県にある精神科病棟を有する 3 施設のいずれかに勤務し、直接患者にケアを行っている看護師 17 名を対象に、フォーカスグループインタビューを実施した。インタビューでは、IPC の 8 領域それぞれについて、自分が行っている看護と、他看護師が行っている看護を思いつく限り挙げてもらった。

5 つめの調査は、当事者から見た看護援助を明らかにするものである。A 県にある精神科デイケアに通所する利用者 5 名に対し、個別インタビュー調査を行った。インタビューでは、自分が受けた援助と他当事者が受けている援助について思いつく限り挙げてもらった。

6 つめの調査は、CVPPP インストラクター（CVPPP トレーナー養成研修を開催できる資格）の看護援助を明らかにするものである。スノーボールサンプリングを行い CVPPP インストラクターの資格を持つ 5 名の看護師に対し、個別インタビューを行った。インタビューでは IPC の 8 領域それぞれについて、自分が行っている看護と、他看護師が行っている看護を思いつく限り挙げてもらった。

（２）作成した看護援助版 IPC を用いて振り返りを行う

2023 年 2～3 月に開催された CVPPP トレーナー養成研修の 4 日目午前のロールプレイ演習で、（１）で作成した IPC を用いた対人相互作用の分析を行った。

４．研究成果

（１）IPC-PC の再現性の確認１

IPC-PC の下位 8 因子で主成分分析を行い、支配性軸と親密性軸の 2 軸を持った 8 角形ができること、因子配置の順序が先行研究と同じであること、各 8 因子は視覚的に概ね等間隔であることの確認を目的とした。

2019 年度全国の 4 会場で実施された包括的暴力防止プログラム受講者 135 名を対象に実施し、結果として、70 名から回答が得られ、欠損と看護師以外の職種を除く 57 名が分析対象となった。

主成分分析の結果は、DE（疎遠・冷淡）が FG（不安・消極的）と重なり 7 角形を示した。その他の因子における順序性、等間隔性は保たれていた。

（２）修正試作版 IPC-PC

「（１）IPC-PC の再現性の確認 1」の結果を踏まえ、精神科看護の専門家からスーパーバイズを受けながら質問項目の修正・項目の追加を行った。

2019 年度に全国で開催された CVPPP トレーナー養成研修の受講者のうち 1,023 名を対象として修正試作版 IPC-PC に回答してもらった。結果、489 名から回答があり、欠損を除く 460 名が分析対象となった。IPC-PC の質問項目の語尾を修正した 32 項目で分析を行ったところ、8 因子の順序性、等間隔性は保たれていたが、新たに加えた 13 項目については十分な負荷量がない項目も多かった。ただし、負荷量プロットが近接した項目よりその因子の概念について考察することができた。それを以下に示す。

FG（不安・消極的）に「場合によっては利用者との接触を避ける」という項目が近接して付置された。これは負荷量が小さく影響は少ないものの、HI（服従・従属）寄りに位置しており、看護師が当事者との接触を避ける場合は、当事者への刺激を避けるなど治療的意味を持たせた意図的なものというよりは、看護師が劣位に立っている状況である可能性がある。

HI（服従・従属）と同じ方向に「説得をする」（負荷量 0.27）「いいなりになってみる」（負荷量 0.44）という項目が付置されたことは、看護師は単に当事者にさからえずに従っているのではなく、当事者に何かを受け入れてもらいやすくするために意図的に従属的に関わる場合を示唆している。つまり行動としては従属的だが、その行動の意図は PA（支配・管理）に近いものである可能性がある。

JK（謙虚・利他）には、LM の「利用者への管理や制限と、人権侵害や罰について考える」が近接し、「利用者のために行動変容を促す」（負荷量 0.30）も近接して付置された。JK は本来 HI の従属性と LM の親和性を併せた概念をもつことから、当事者の後ろを伴奏しながらサポートしていくような援助が想定されていた。しかし利他性として当事者の利益のためには先導したサポートを行うことが含まれるのかもしれない。看護援助の従属性は、支配性が背後にある特異的な特性である可能性がある。

LM（親密・温和）の領域では、新たに加えた「利用者に対して誠実である」（負荷量 0.60）「自分の援助に責任を持つ」（負荷量 0.59）「利用者が安心するように援助を行う」（負荷量 0.56）について高い負荷量が認められた。IPC-PC の LM は「確信的援助」という因子名であるが、その概念に合致する内容が付置された。

NO（自信・積極的）の領域には、「効率的に援助を行う」（負荷量 0.37）が付置し、「援助には自信がある」（負荷量 0.49）が LM の「的確な指導をする」に近接して付置した。NO の示す自分の援助を悲観視せず、感情に流されず、自分に都合の良いこじつけをせず、当事者の言いなり

にならない姿勢は厳格さを示す因子であった。
以上「（１）IPC-PC の再現性の確認 1」で DE と FG が重なること、「（２）修正試作版 IPC-PC」での HI や JK という従属性にかかわる部分に支配性成分が認められたことからは、IPC-PC の項目の修正には今後も検討の必要があると考えられた。

（３）IPC-PC の再現性の確認２

「（１）IPC-PC の再現性の確認 1」「（２）修正試作版 IPC-PC」の結果を踏まえて、CVPPP トレーナー養成研修受講者といった特定の集団ではなく、関東地方の医療観察法指定入院医療機関を持つ施設に協力してもらい、「IPC-PC の再現性の確認２」を実施した。
2022 年 8 月～10 月までの間に精神科病棟に勤務し、直接患者にケアをしている看護師 1,715 名のうち、613 名から回答があり、項目に欠損がある回答を除き、587 名が分析対象となった。
IPC の定義である、8 因子の視覚的等間隔性は示され、順序性も適切であった。「（２）修正試作版 IPC-PC」と「（３）IPC-PC の再現性の確認２」の結果から、「（１）IPC-PC の再現性の確認 1」の結果は、サンプルサイズが小さく、母集団の影響が考えられた。

（４）看護師からみた看護援助

看護師からみた看護援助を明らかにするために、直接当事者への援助を行っている看護師を対象とした。グループは各施設の看護部長または病棟看護師長に依頼し、3～5 名のフォーカス・グループを作ってもらい、インタビューは各施設のプライバシーが確保された個室を借りて行った。インタビューの所要時間はおよそ 60 分であった。
分析対象者は 1 年目から 20 年以上の勤続年数の看護師で、女性 10 名、男性 7 名の合計 17 名であった。
PA（支配・管理）－HI（服従・従属）について、PA には、制限をかけるとき、管理をするときが挙げられた。しかし、PA を当事者に実施する場合には、その伝え方が多様であることが語られた。はっきりと制限や管理を看護師が行うことを伝える、当事者自身になぜ制限や管理をかけられるのか考えるよう促す、あえて看護師が劣位的立場にいるように低姿勢をとるなどがあった。あえて低姿勢をとることは、量的研究にもあったように、看護援助版 IPC の従属性の特異的性質を示唆している。一方で HI として当事者から命令をされたり、当事者からの依頼を断れないときのように一般的な IPC の従属性を示す内容もあった。PA－HI にある上下関係についてインタビューをする中で、できる限り当事者と対等な立場をとりたいという語りがあった。しかし当事者から「看護師さんって偉いね」と言われると、当事者が看護師を優位に見ていることが感じられ、「こころに突き刺さる」思いがすると語られた。「相手の価値観に応じたかかわり」が求められることが他領域の看護とは異なる精神科看護の特徴であるとも語られた。
DE（疎遠・冷淡）－LM（親和・温和）については、看護師の態度からの語りと当事者の態度からの語りがあった。DE では好き嫌いで物を言っているとき、当事者に怖いという思いを抱いているとき、当事者のパーソナルスペースが広くて踏み込めないときや、逆になれなれしいときには見捨てられたと思われない程度に距離を取ることなども語られた。LM は悩みや思いを打ち明けてくれたとき、居室という閉ざされた空間の中 2 人で話ができるときが語られた。DE－LM にある親疎関係は、個別性が高く、それぞれの精神科看護師はそれぞれの当事者に対し、独自の距離を共に創り、それは絶えず変化していることが語られた。
BC（傲慢・利己）－JK（謙虚・利他）と FG（不安・消極的）－NO（自信・積極的）については、看護援助を行う上でのこころの安寧や援助への自信といった、こころのゆとりの影響と関連していた。こころのゆとりがあるときは当事者に対し丁寧で深く細やかなかかわりができるが、こころのゆとりがないときは目の前にあるやるべき業務を遂行することに終始し、視野が狭く、感情的になりやすい。こころのゆとりがなくなる要因として、当事者の不穏の予兆を察知したり、不穏な状態の当事者にかかわる場合だったり、当事者から同じことを繰り返し訴えられたり、時間がなく多重業務を行うことが挙げられた。一方こころのゆとりを取り戻す要因として、周りの看護師からの精神的・業務的フォローや、優先順位をつけて時間を作ること、当事者のこれまでの人生を知り現在の行動の背景を考えることが挙げられた。

（５）当事者から見た看護援助

当事者からみた看護援助を明らかにするために、A 県にある精神科デイケアに通所する利用者で、精神症状が落ち着いており 5 名を対象に半構造化面接を行った。当事者の疾患は特定せず、精神科病棟に入院歴があるものとした。40 歳代～60 歳代で、疾患は ICD-10 による分類で，F1「精神作用物質使用による精神および行動の障害」が 1 名，F2「統合失調症，統合失調症型障害および妄想性障害」が 2 名，F3「気分（感情）障害」が 1 名，G40「てんかん」が 1 名であった．なお、IPC の枠組みでは、BC（傲慢・利己）や DE（疎遠・冷淡）のように一見すると援助とは言えない領域もあるが、当事者が援助として語ったものを本研究の対象として扱った。
5 名の語りを IPC の 8 領域の枠組（Figure1）に演繹的に分類した後、帰納的に解釈してコードとカテゴリーを生成した。図化すると Figure2 のようになった。
支配性を示す PA（支配・管理）に分類された看護援助は、治療必要性を重視し、看護師が当事者の態度や行動を変えるように働きかけるもの、HI（服従・従属）は看護師が当事者に逆らえずに過度に謝罪をするものであった。PA と HI に分類された看護援助には、当事者の反応に経時的な変化を示すものがあった。例えば、納得できなくても理詰めで物を言われる抑圧的な看護援助について、当事者がまだ疾患を受け入れられない時期には「反発したかった」と表現しているが、現在は「正直に聞いていたらよかったのにね」と語っている。これは当時発せられた看護

師の目的や意図が、時を経て当事者に伝わったことにより、心理的意味付けが変化したからであると考察された。

DE（疎遠・冷淡）は PA（支配・管理）とは相関関係を持たないため、通常の IPC では DE に支配性は含まない。しかし、DE に分類された語りの中で、例えば、預かり物品を出してほしいと看護師に伝えるも、すっと帰ってしまうという回避的な看護師の行動は「上から目線」と捉えられていた。当事者は看護師のかかわりを回避することはできない中で、看護師から避けられると、当事者はかかわりの主導権が看護師にあり、自分の尊厳が守られていないと感じることで看護師の優位性を認識する可能性がある。看護師は自らの発揮する優位性（支配性）を自覚することが肝要であると示された。

LM（親密・温和）では、量的研究にあった看護師の援助への熱心さではなく、当事者と看護師が平面に立ち、例えば外泊中に一緒に酒の空のパックを片付けるなど、形式ばった支援でなく、治療的操作をすることはない中での交流が、当事者に安心や安堵をもたらすことを示した。

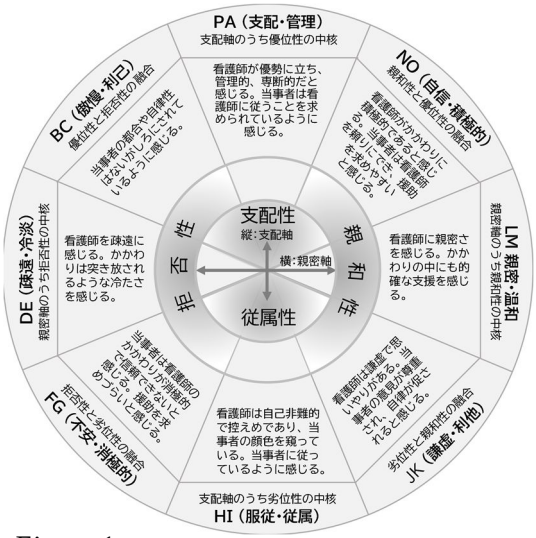

Figure1

IPC の 8 領域は日本語版 IPC（戸苅，1993：橋本・小塩，2016：木下・下里，2020）を基に看護師の行動を定義した.

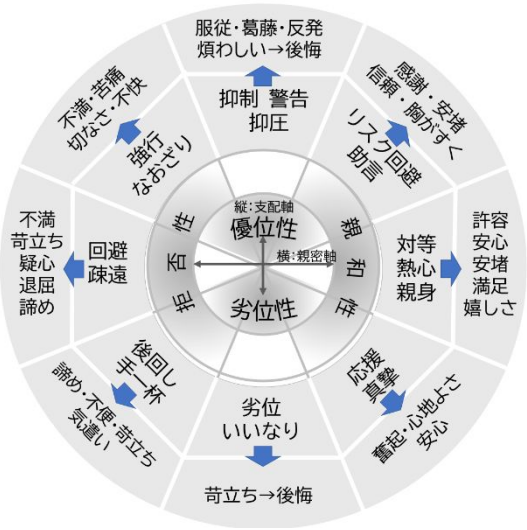

Figure2

矢印の内側は知覚した看護師の行動を、青矢印の外側はその知覚から生じた反応を示す。

（6）CVPPP インストラクターから見た看護援助

CVPPP に精通している CVPPP インストラクターの看護援助を明らかにするために、スノーボールサンプリングを行い、CVPPP インストラクターを対象に個別インタビューを行った。

分析対象者は全て CVPPP インストラクターを取得して 5 年以上であり、CVPPP に精通しているものであった。男性 3 名、女性 2 名の合計 5 名で、インタビューの所要時間はおよそ 90 分であった。

語りの中で、一般の精神科看護師を対象とした調査結果との違いは、当事者の思いに気を配る内容が多く、現状行われている援助について「何が当事者の攻撃性を高めるフラストレーションにつながりうるか」を明確に考えている点であった。「冷たく接することが治療的に良い」「かかわりは薬物療法で落ち着いてからするもの」と言った従来の通説に対し、当事者にとってそれらが持つ意味に考えを巡らせ、当事者を知ろうとする姿勢が現れていた。

これらを明確にすることで、CVPPP の成熟度や、CVPPP の理念が実践に応用される例が明らかにでき、よりよい研修に寄与できると考える。今後も引き続き実施していく。

（7）作成した看護援助版 IPC を用いて振り返りを行う

研究期間を通して作成した対人円環モデル（Interpersonal Circumplex model：IPC）図を看護援助の振り返りに活用した。振り返りは以下のように構造化した。

①図１の IPC の 8 領域概念のシートを基に、普段行っている・見かけている看護師の行動を挙げてもらう。

②シートを基に支配性・従属性・親和性・拒否性といった IPC の 2 軸の性質からも客観的に看護師の行動を捉える。

③2020 年に実施した精神障害をもつ当事者を対象としたインタビュー調査結果から作成した、当事者から見た看護師の行動を示す IPC を提示し、看護師の行動が当事者にどのように知覚され、どのように当事者が反応するかという例を示す。

④検討する事例で行われていた支援者の行動を IPC の枠組みから多面的に検討する。

その結果、「援助を良し悪しの 2 分化ではなく深く捉えることができた」、「同じ言い方であっても人によって印象が大きく異なることが分かった」、「IPC の枠組みを用いることがわかりやすかった」という意見が聞かれた。今後は本研究で作成した精神科看護師の行動の振り返りのためのサポートツールの有用性を、量的に検討することが課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 木下愛未,下里誠二,南方英夫	４．巻 48（2）
２．論文標題 精神科看護者の感情のゆらぎと看護援助との関連	５．発行年 2021年
３．雑誌名 精神科看護	６．最初と最後の頁 62-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山下大樹,佐藤裕子,木下愛未	４．巻 3（1）
２．論文標題 意思疎通困難事例へのCVPPPに基づく当事者中心の介入-当事者と看護師の安心と安全を創るための検討-	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本こころの安全とケア学会誌	６．最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Aimi Kinoshita, Seiji Shimosato	４．巻 Published Online
２．論文標題 Effectiveness of an Aggression Management Training Program in Japan: A Quasi-Experimental Study	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Issues in Mental Health Nursing	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/01612840.2021.1999542	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木下愛未，下里誠二	４．巻 48
２．論文標題 CVPPPがめざす新しい関係性 第4回 言葉に先立つものとは？	５．発行年 2021年
３．雑誌名 精神科看護	６．最初と最後の頁 72-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木下愛未，下里誠二	4．巻 62(2)
2．論文標題 包括的暴力防止プログラム（CVPPP）インストラクターにおけるリスクアセスメントの実態調査	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本精神科看護学術集会誌	6．最初と最後の頁 14-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 下里誠二，木下愛未	4．巻 62(2)
2．論文標題 精神科看護者の安心・安全感と援助特性、病棟環境の関連	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本精神科看護学術集会誌	6．最初と最後の頁 63-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木下愛未，風間眞理，田中留伊，松本賢哉，宇都宮智	4．巻 2(1)
2．論文標題 新型コロナウイルス感染拡大下での精神科医療職者の現状調査	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本こころの安全とケア学会誌	6．最初と最後の頁 85-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木下愛未，下里誠二	4．巻 17
2．論文標題 精神科スタッフナースの怒り感情喚起場面での怒りに関与する要因の検討－認知傾向・感情・態度との関連－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 看護科学研究	6．最初と最後の頁 1_13～1_17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 木下 愛未、下里 誠二	4．巻 43
2．論文標題 対人円環モデルに基づく精神科看護援助特性質問紙の開発とその信頼性・妥当性の検討	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本看護研究学会雑誌	6．最初と最後の頁 1_37～1_49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15065/jjsnr.20190803071	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 下里誠二,久松久美子,中村日出夫,萬代果恵,木下愛未
2．発表標題 包括的暴力防止プログラムのためのケアシートに関する研究－事前事後評価及び記述分析によるパイロットスタディ－
3．学会等名 第28回日本精神科看護専門学術集会
4．発表年 2021年

1．発表者名 木下愛未，下里誠二
2．発表標題 精神科看護者の倫理的感受性と看護援助との関連について
3．学会等名 第30回日本精神保健看護学会学術集会
4．発表年 2020年

1．発表者名 木下愛未，下里誠二
2．発表標題 精神科看護師の患者に対する支配-従属特性の違いと攻撃性との関連
3．学会等名 第27回日本精神科看護専門学術集会
4．発表年 2020年

１．発表者名 下里誠二，鶴川柾也，木下愛未
２．発表標題 看護学生の対人関係上の困難感に関する研究
３．学会等名 第27回日本精神科看護専門学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山下大樹，佐藤裕子，木下愛未
２．発表標題 意思疎通困難事例へのCVPPPに基づく当事者中心の介入-当事者と看護師の安心と安全を創るための検討-
３．学会等名 第3回日本こころの安全とケア学会学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 下里誠二，木下愛未
２．発表標題 対人円環モデルに基づく精神科看護師の援助行動上の特性を明らかにするための予備的研究
３．学会等名 第29回日本精神保健看護学会学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 木下愛未，下里誠二
２．発表標題 精神科看護師の援助行動特性における経験の違いによる比較
３．学会等名 第29回日本精神保健看護学会学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小野木和昭，木下愛未，下里誠二
２．発表標題 地域関係機関への普及啓発活動-医療観察制度の効果的な普及啓発活動の模索について-
３．学会等名 第44回日本精神科看護学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋宏子，奥野ひろみ，石田史織，鮫島敦子，木下愛未，坂口けさみ
２．発表標題 県内の訪問看護師が考える地域包括ケアシステム推進に向けて必要な力
３．学会等名 第14回信州公衆衛生学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋宏子，平林優子，鮫島敦子，木下愛未，深澤佳代子，奥野ひろみ，坂口けさみ
２．発表標題 A県内の訪問看護師から見た在宅療養支援上の課題認識
３．学会等名 第50回日本看護学会ヘルスプロモーション学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 下里誠二，木下愛未
２．発表標題 精神看護者の安心・安全感と援助特性、病棟環境との関連
３．学会等名 第26回日本精神科看護専門学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 木下愛未，下里誠二
２．発表標題 CVPPPインストラクターの活用するリスクアセスメント項目の現状に関する研究
３．学会等名 第26回日本精神科看護専門学術集会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 一般社団法人日本こころの安全とケア学会、下里 誠二	４．発行年 2019年
２．出版社 中央法規出版	５．総ページ数 294
３．書名 最新　ＣＶＰＰＰトレーニングマニュアル	

１．著者名 川野 雅資	４．発行年 2019年
２．出版社 中央法規出版	５．総ページ数 306
３．書名 エビデンスに基づく精神科看護ケア関連図　改訂版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関